

目的 現在の農漁山村において在来型の作業着は殆んど消滅しその姿はない。しかも着用経験者も高令化している。このような現状にかんがみ、宮城県全域にわたって在来型作業着を調査・記録し、風土や歴史に根ざした衣生活を考究する。

方法 現地に着用・縫製経験者をたずね、種類・名稱・型態・材料・縫製・着装などについて聞き取り調査を行い、実物については計測観察し、可能なものは実物の製作をした。

結果 亘理町は宮城県の南東部にあり亘理郡の北半分を占めている。東部は太平洋に面し、阿武隈川が海に注いでいる。西部は角田市に接し、南部は山元町に隣接、北部は阿武隈川を隔て、岩沼市に對している。中央部は亘理耕地とよばれる平地である。藩政時代は亘理伊達氏の所領地であった。維新後伊達邦成は北海道に移住、開拓に従事した。明治22年旧17ヶ村が1町3村に統合され、更に昭和30年旧町村を合併して亘理町となった。調査地A新渡は農漁業、B上郡は農・養蚕業で生計をたて、いた。作業着は名稱・枚数が略々通であった。種類・型態では「かぶくもの」、「間着」、「外被」で男子に相違があり、A新渡では「てぬい」の地にネルを大巾のまゝ三角に折り頭部・頬を包み後で結んで、冷たい潮風やしぶきを除けていた。また「間着」に短かい筒袖、半天型の胴着、「外被」にさしこわんばれがあつて漁業従事者の特徴が見られた。女子の「もんぺ」はA・B共裁ち方は殆んど同じだがAに15C角の小裆が入りBにはない。Bはまた角田市藤尾のものと同型であった。「つんぬき」はAが一っ身裁ち。Bは三っ身裁ちであるが、これは海辺と山地の気温、漁業と農業の労働の季節、経済力などの差によるものと思われる。